

すぎなみソーシャルデザイン塾～すぎなみをデザインする社会起業家になる

第三章 すぎなみブランディング（すぎなみの固有価値を掘り起こしデザインする）

斎藤義之さんのプロフィール

宇都宮大学教育学部卒 早稲田大学大学院助手、日本福祉大学・知多半島総合研究所主任研究員を経て現職。専攻分野は近代日本商業史、流通史。主な編著書に「内海船と幕藩制市場の解体」（柏書房）「商いから見た日本史」（PHP）などがある。

学術資料の保存活動として愛知県南知多内海浦の内田佐七家文書や、常滑市の滝田家、滋賀県河野裏右近家文書などがある。

「杉並っぼく、まちづくりー過去を未来につなぐ手法」 06年12月20日

ゲスト講師：東北学院大学 経営学科教授 斎藤善之さん

東北・仙台周辺の地域である仙台・塩釜・気仙沼などの商家にある近代期の物流拠点資料を見つけるために、仙台に住み着いて学術研究をしています。

私の専門分野は商家の経営分析ですが、そのためには旧家の蔵に保管されている資料（勘定帳・覚書・手紙等）を読み込みをします。また、資料や建物等の保存にも力を尽くします。このようなことを続けながら、北海道から下関経由の大坂までの西廻り航路と大坂から江戸までの東海沖航路、さらに江戸から北海道までの東廻り航路の物流拠点等の調査をしているところです。

このような経験から、古くなった家・蔵を地域に生かす手法を考えたNPO的な活動も展開していますが、意外にも家や蔵のオーナーが、その存在と価値を気にしていないケースが多々あります。

< 観点 >

外部の目線

地元の人が、価値を気にしていない、気が付いていない場合、外部の人たちが資料や建物などを生かす方向付けをする。

その際、地域の人々、市民の協力を得て、

- ・地域にどのような資料、建物等があるのか
- ・年代、様式等の分類等

各分野ごとの専門家に学問的な裏づけをしていただくことが肝要

地域の目線

地域に散在する歴史的な資料や建物等の学問上の裏づけ資料を理解すると、資料の保有主や行政、NPO、市民等の方々との議論がぶれない、地域資料を生かすためにはお互いの協力をしないといけないという雰囲気醸成される。

このように、地域外の目線と地域内の目線と併せ持つ地域活動が展開されるということが重要と考えています。そして、埋もれている「地域の知」を発掘し、地域づくりに生かす手法を開発していくことも私の役割でもあると考えています。

今回、お話しする「塩竈・亀井邸の保存・活用について」ですが、私はまず、千葉大学工学部の玉井哲雄教授(玉井研究室)に相談をし、学術支援資金(国土庁の都市再生モデル調査事業)を得た上で塩竈市内の歴史的な建物調査をしていただきました。そのなかで課題として浮かび上がった建物が、大正13年に建てられた商人邸宅の亀井邸でした。本日は、この話を中心にして、皆様が、まちおこしや、「すぎなみブランド」を考えていく際の参考になればと考えてお話をします。

1 塩竈・亀井邸の保存活用について

はじめに

塩竈神社に向かう裏坂の途中に、大正13年に建てられた亀井邸があり、現在亀井家(商社カメイ)の所有となっている。数年前から無住となり、失火等の不安があるということでカメイ側では取り壊しを検討していた。

私たちは

- ・塩竈の歴史を象徴する文化財、観光資源の大きな損失
- ・この建物を保存し、塩釜の地域史と文化をしのぶ貴重な遺産としたい
- ・一般にこの建物を公開し市民のみならず観光客の休憩に活用し、塩竈観光の拠点としたい

このように考えました。

注) カメイ(株)仙台に本社を置く総合商社 <http://www.kamei.co.jp>

亀井邸の価値

- 1) 亀井邸の建築された大正13年頃を挟む大正～昭和初期は、伝統的な日本建築のひとつの頂点の時期とされる。その理由として、
 - ア) 材料の流通が活発化し、高品質の材料が手に入りやすくなった時期であること。
 - イ) 木材を加工する諸道具類(いわゆる大工道具)の発達で頂点に達した時期であること。
 - ウ) 技術者(大工を始め、左官・建具・瓦屋などの関連職人たちを含む)の技術が最高潮に達した時期であること。その後戦時体制にはいると建築水準は急速に低下し、戦後は洋風建築へと移行するため、伝統的日本建築としては最後の頂点の時期となる。
- 2) 亀井邸は「和洋併置式住宅」といい、明治時代には最上層(皇族・華族階層)の大

邸宅に用いられていた「和洋二館式住宅」を、庶民（といっても相当な上層）にも手の届くものとした建築様式で、伝統的な和館（日本建築）に洋館（西洋建築）を取り入れて建てられたものである。これは戦前期には全国の都市などで流行するが、その後現在まで残るものはたいへん少なくなっている。

3) 亀井邸は、和館と洋館ともに、すぐれた材料をすぐれた技術で建てており、随所に当時流行した様々な意匠（デザイン）を取り込み、相当に手をかけて造りこんでいる。例えば洋館には、当時パリから始まったアールヌーボー、アールデコ、ウイーンを起点とするセセッション様式のデザインが、また和館にはこの時期がピークであった仙台筆筈を室内装飾に大胆に用いるなど、当地ならではの固有のデザインと世界的なデザインとが融合した意匠・デザインを作りだしているという点で、他に類例をみないきわめて貴重なものである。

4) このようなすぐれた建築が建てられた背景には、当時の塩竈の経済的繁栄があった。そのなかで経済的に成功した亀井家はこの建物を建てたのであり、塩竈の繁栄がなければこの建物も実現しなかったはずである。亀井邸が戦前の塩竈港町の繁栄を象徴する建物であるというのは、そうした由縁による。

亀井邸の保存

1) 亀井家（とカメイ本社）は、この建物に相当な思い入れがあるものと想像される。これを取り壊すという意見の背景にも、亀井邸が無住のまま徐々に朽ち果てていくとか、不審火のようなことになるくらいなら、むしろキレイに取り壊してしまうべき、という誇りがあるのではとも推測した。

2) そのようなことから、この建物については、やはり塩竈市が、市として亀井家ないしカメイ本社に働きかけ、これを借り受ける（無償貸与、有償貸与）か、または譲り受ける（寄贈、買取）のがもっとも亀井家側に受け入れられやすく、民間の個人ないし団体ではかなり難しいのではないかと推測した。

3) 亀井家（カメイ本社）側が取り壊しの動機とするのはセキュリティーの問題であると表明していることから、塩竈市が管理責任を負って頂くことで、貸与（または譲与）の可能性は高まるものと思われた。

亀井邸の活用

1) 亀井邸は積極的に活用できる可能性がある建築である。周囲には集客力のある観光資源（鹽竈神社）があり、そうした立地条件を生かした積極的な利活用が亀井邸を守

ることにもつながる。

2) 市が保存を保証し、活用については各種団体（商工会議所等）、民間団体（NPO等）に依託するのがよいのではないか。

3) 活用の具体例

主家の内部（座敷等）で次のような展示をおこなう。

建物は現状を維持するものとし、各種展示物・ケースなどもいつでも原状に復帰できるようなものとする。また亀井邸は公開し入館料を徴収する。

メインテーマは「近代（明治大正）期の塩竈の商家・商人」

亀井邸主家1階座敷 「塩釜港の繁栄」（古写真・古地図から）

同 「塩竈と亀井家 亀井文平とその時代」（カメイの社史から）

主家2階座敷 「塩竈の商人群像」（塩竈市史・斎藤ゼミヒアリングから）

同 「亀井邸の建物・室内・家具」（玉井ゼミの報告から）

主家2階座敷では、歴史講座や楽器の演奏会等も可能。

洋館はミニギャラリーとして 地元関連の絵画展、写真展などを常設展示、企画展示する。 離れ お茶・お菓子などの有料での提供が可能であろう。

中長期的な展望

1) 上記のような亀井邸の保存活用は、さらに以下のような塩竈旧市街の活性化策と連動させることが望ましい。

2) 勝画楼の修復・保存・活用構想

勝画楼を修復し、内部を展示スペースとして市民・観光客に公開する。

メインテーマは「近世（江戸時代）の伊達家（武家）文化と塩竈」

サブテーマ（部屋ごと）は

「勝画楼を訪れた歴代藩主と明治天皇」 書院での展示

「塩竈を訪れた有名人たち」 脇書院での展示

「江戸時代の塩竈の繁栄 古絵図からみた塩竈」 広間棟

「奥塩地名集の世界 江戸時代の塩竈を訪ねて」 広間棟

勝画楼と亀井邸の役割分担は

江戸時代（勝画楼）と明治大正（亀井邸）、

武家文化（勝画楼）と商人文化（亀井邸）の対比（コントラスト）で演出

ただし勝画楼と亀井邸を合わせて観ていくと、江戸時代から戦前までの塩竈の武家文

化・商人文化が総合的に理解できるようにする。両者をセットにした割引入館券を造り連動させる。

3) 基金あつめ

両施設の保存整備に関しては、亀井家からの1億円の基金の一部を活用する案のほか、市民に趣意書を回して幅広く募金を募り、基金設立することなどが考えられる。保存運動を市民運動として展開する。

4) 鹽竈神社の観光客を、亀井邸・勝画楼に誘引し、さらにそこで「町中見どころマップ」「塩竈うまい物マップ」などを配布して、旧市街の伝統建築群や美味の紹介によって、観光客を旧市街へと誘導し、回遊型の観光ルートを造り出す。

5) 亀井邸と勝画楼は、当面は市の文化財とし、ゆくゆくは県、国の文化財指定にもっていく。

実際に、同様のケースとして、私自身が、

1) 愛知県常滑市の焼き物散歩道と廻船問屋瀧田家の修復整備事業、

2) 福井県河野村の北前船の歴史村事業のなかでの北前船主右近邸の保存活用事業、

の2つのケースで極めて似た状態のものを保存復元し、観光拠点とすることができた事例を体験していた。

2 現在の状況

亀井邸保存活動の現況ですが、塩竈市、亀井家、カメイ(株)並びに NPO,市民等の支援と理解を得て

- ・ 亀井家はこの建物を取り壊すことを中止する、塩竈市は亀井邸を借り上げ、
- ・ NPO 側に無償貸与する (NPO 法人 みなとしほがま)、改修整備は NPO 側に任せる。
- ・ NPO 主導で土日オープンし、邸宅のインフラ整備費用を捻出するために有料とし、湯茶・菓子等を有料で提供する。
- ・ 塩竈市内に点在する歴史的建数箇所と相互利用のネットワークを組む
- ・ 亀井邸の管理補修のために公的、私的基金を募る。

< 基金組成の例示 >

市民募金や塩竈企業、塩竈商工会議所の音頭で基金を募る。無理なくできること始める精神でいくこと。

3 この活動のプロセスから生まれたもの

- ・ 市民活動として安っぽい活動にしない、歴史を曲げないこと

歴史的学術調査を始めにする、理解をする。数十人でも同じ理解の下に結集するとやがて行政や企業は動く。

- ・地道な研究活動より始めること、日頃の勉強が基礎となる。

事例として、「NPO みなとしほがま」の活動をお知らせします。

古文書部会（毎週火曜日、市内寺院に会員が集まり地元の代表的な古文書を題材に江戸時代の塩竈の姿を学んでいる）

京都と塩竈の縁を深める(京都市下京区本塩竈町の地名がある、塩竈山上徳寺・塩竈義弘住職をお招きして交流)

200年前初めて世界一周した仙台人の顕彰碑を寒風沢島に建設

- ・歴史を街づくりに生かすと強い。本物の歴史が持つパワーを引き出すこと。市民の関心も呼ぶ。
- ・市民が活動しだすと行政は市民の活動の場を提供するようになる。
- ・良質な市民活動を意識する、手順が大切で、成果物は後でついてくる。
- ・研究者として新たな気付きもある。

事例 出桁造り（だしげたづくり）

多くの町家に出桁が意匠的に用いられているだけでなく、亀井邸のような住宅にも用いられていること。

* * 出桁造り：出桁造りは軒を支える構造形式で、柱から突き出した数本の梁の上に桁を乗せ、垂木をかける。実際に構造的な意味を持つ梁は、柱にささる両端の梁だけで、中間の梁は束に差し込み、上にある桁にボルトで固定されている。本来は軒を深くするための構造だったが、建物正面から見たとき、梁の木口・桁が整然と並び、美しいことから、町家の外観として普及した。

* * 関東大震災以降の東京でも、出桁造りが流行った。復興を支えるために、塩竈地域の大工が東京に行って広めたのか。全国的な調査が必要と考えている。

< 参考資料 >

地域の伝統建築 その保存と活用を目指して－宮城県塩竈の事例
PDF添付資料をご覧ください

4 主な質疑事項

歴史的な評価を得ていない、例えば昭和初期の看板商店など、保存の手を差し延べにくい建物などについて、どのような活動手法があるのか。

比較的新しい建物でも、基礎的な調査をする、その調査結果は社会的な認知を得ていることを知らせると声は必ずオーナーに届く。

ここにあることがすばらしい、この建物が好きだ！ という訴求点になる。

亀井邸の改修保存活動について

亀井邸の改修は地元の素朴な大工さんに依頼をした。改修は継続的に息永くやっていくものだから地元の大工さんに頼んだ。

「親父が亀井邸の工事をしていた」といった理由があったりして進んで協力してくれた、親父の技法に触れて忘れていた技法が甦る。(事例：たたみ)このような事から、技法の知が記憶装置となって残る。本物を残す活動につながる。

管理運営について

建物：市民的なギャラリーとして活用する。

庭園：昭和初期から30年代までのノスタルジーを残す工事整備が始まっている。

建物の生かし方と市民の関わり方について以下のように考える。

行政：市民の活動拠点として使えるように管理と整備する。

市民：議論をしながら使い方を考える。

市民的なギャラリーの運営について

いかに市民を巻き込んでいくのかがテーマと考えている。亀井邸の存在を知らなかった人たちが、市民のシンボルとして亀井邸を認識していただくようになるのか、ならないのか。人たちが暮らしている塩竈の想いがよい方向に変化して、市民のシンボルとしての亀井邸像が出来上がれば成功と考えている。だから、亀井邸で行うギャラリーが一年間かけてじっくり考えながら進めてもよいと思う。歴史的な建物を行かせる企画がよい。過去から未来に繋ぐ亀井邸がコンセプトです。